

# 謎に包まれた縄文文化繁栄の地

－ 柏の縄文中期集落群 －

千葉市埋蔵文化財調査センター 西野雅人

## はじめに－近年の動向－

いわゆるバブル景気の前後、昭和・平成の国土大開発時代は“大発掘の時代”でもありました。県内各所で大規模発掘がつぎつぎと行われ、膨大な数の調査報告書が刊行されました。たくさんの遺跡が失われた一方、得られた成果も膨大でした。近年は東葛地区を中心に再び開発が増えており、今回取り上げる「謎に包まれた縄文文化繁栄」はそれによる近年のトピックです。柏の中期集落群は以前から注目されてはいましたが、これほどの規模とはだれも考えていませんでした。常識を覆すほどの発見だったのです。

## 1 縄文人のライフスタイル

今から1万年以上前のこと。長い氷期が終わりを告げると、温暖な気候と海面上昇によって豊かな森と海が広がっていきました。こうした環境を得て、縄文人は、数多の食材を探索し、獲得・加工・調理の技術を研くこと<sup>みか</sup>によって、多様で新鮮な食材を活かした食文化を育てていきました。さらに食料の保存技術を研ぎ、ムラの周囲に有用植物の里山をつくって一年を通じた安定した食を手にする、定住生活をはじめ、豊かな文化を生み出していきました。“東京湾東岸の大型貝塚群”は、こうした縄文時代の豊かさを象徴する存在です。

人類の基本的なライフスタイルは、その誕生から定住をはじめるまでの数百万年変わりませんでした。比較的小規模な集団で居住場所を移動しながら生きる“遊動”スタイルです。日本列島において最初に“定住”スタイルの生活を始めたのは縄文人です。そのことをものがたる確かな証拠が、縄文中期に現れた東京湾東岸の大型貝塚群です。東葛地区は

その北端にあたりますが、野田市と流山市には大型貝塚があるのに、柏市にはありません。ところが、実はすごかった、というのが本日のお話です。まずは、東葛地区の地形的な特徴や縄文時代の概観からみていきましょう。

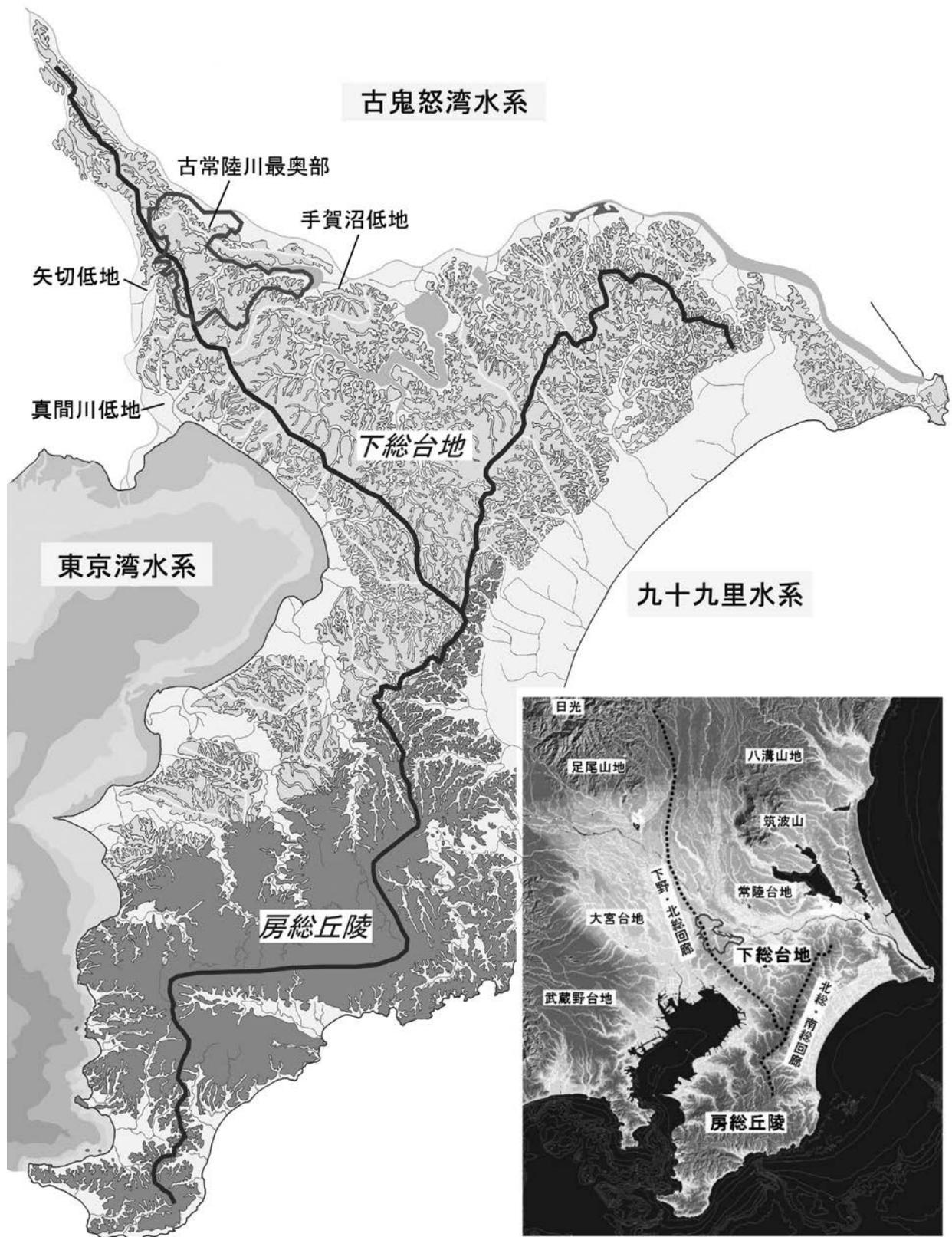
## 2 東葛地区の地形

### (1) 下総台地と二つの自然道

下総台地は日本一広く平らな土地であり、このことは縄文人にとって大きなメリットであったはずで、す。主な食材であったドングリやイモ類の収穫は、移動コストの少ない森林が広いほど大きくなり、また、東京湾の湾奥部に広がった生産性の高い海とムラの間を舟で行き来するのにもたいへん便利でした。丘陵部から流れる河川の場合、河底の傾斜が大きいと、海に出るのは楽ですが、ムラに戻るのが大変で、日常的な往来がむずかしいからです。この点は、縄文時代の貝塚が下総台地に集中する最大の要因であったと考えられます。縄文人のムラが集中した関東地方の一画にあって、北・東関東を通じて東北と、西関東を通じて中部地方とのつながりを持ち得たことも、繁栄をもたらした要因と考えられます。

房総の地形は下総台地、房総丘陵、沖積低地で構成され、水系は3つに区分することができます(第1図)。3つの水系を区分する大きな分水嶺は、二つの自然道であり、各時代に交通路として利用されたと考えられます。

二つの自然道は、①日光・足尾山麓から小山―古河―関宿―野田―柏―鎌ヶ谷―船橋―千葉市土気を結ぶ「下野―北総回廊」<sup>しもつけ ほうそうかいろう</sup>と、②房総丘陵と北総を結ぶ「北総―南総回廊」<sup>ほうそう なんそう とけ</sup>であり、千葉市土気がその交



第1図 房総の地形と柏市の位置 (右下は関東の地形と二つの回廊)

差点でした。前者は、江戸時代の利根川東遷事業 (1654年赤堀川通水等による利根川の流路変更) 以前に存在した関東で最も長い自然道でした。シカな

どの動物が日光・足尾山麓と下総台地の間を移動するルートであったと推定され、下総台地は長く野生動物の宝庫＝狩猟好適地でした。

## (2) 柏市域の特徴

### ◆二つの特徴

市域は下野-北総回廊を跨いでいます(第2図)。西は東京湾水系、北は茨城の台地と接しており、人やモノの行き来にも便利なところでした。柏市あるいは東葛地区の縄文時代をみる上で二つの大事なことがあります。

#### ① 大きな二つの内湾が接する場所だったこと

縄文前期には、今よりずっと内陸に入り込んだ巨大な入海が二つ、この地域で接していました。内湾の一番奥部は栄養塩が流れ込む海のなかでも一番生産性が高い場所です。

#### ② 人とシカ共通の大きな道にあたること

狩猟好適地であり、広域間の交通の要衝でもあるというこの二つの特徴が、柏市域に縄文時代の重要な遺跡が多い理由を考える上で、鍵になるようです。下総台地全体でみると、人口や繁栄の中心が時期によって大きく変化しています。この変化を読み解くことによって、柏市付近の縄文文化の特質や、輝いた時代の社会や生活の様子が見えてくることと思います。

### ◆古鬼怒湾水系

第2図のように、市域の大部分は古鬼怒湾水系に属し、その南部は「手賀沼低地」の水系です。北部手賀沼の北岸は我孫子市域、南部手賀沼の南岸は印西市・白井市域であり、その南の「大津川谷」南端もわずかに鎌ヶ谷市域に含まれています。一方、市域の北端部は「古常陸川低地」の最奥部の「柏・我孫子低地」にあたっています。その北西端は「三ヶ尾谷」(現在の利根運河付近)の南半にあたり、北半は野田市域につながっています。「柏・我孫子低地」の北側には茨城県の「猿島台地」先端と「取手台地」があります。

### ◆東京湾水系と二つの水系間の交通

市域の西端は下野-北総回廊を挟んで東京湾水系の「矢切低地」水系の谷頭を取り込んでおり、流山市・松戸市域につながっています。このように、市域は二つの水系のいくつもの小水系を複雑に取り込んでいることが特徴です。柏市の歴史や文化を考察する上では、隣接市域を併せて検討することが重要であり、県境を越えて常総台地との関係に注目することが大事になります。



第2図

なお、現在の柏市は海岸から遠く離れて内陸的ですが、縄文早期後葉から前期にかけては、市域の東西にハマグリなどを採取できる海がありました。縄文海進でできた二つの内海です。古鬼怒湾水系では現在の銚子付近から「古常陸川低地」最奥部まで、東京湾水系では「今上低地」まで海が入り込み、縄文時代中期ころまでに「手賀沼低地」の東端付近まで退いたようです。



第3図

### 3 柏市域の縄文時代

#### 概観

##### (1) 遺跡と貝塚の集中

全国の縄文時代遺跡数は約2万8千件、分布の中心は関東で、下総台地に濃密です。全国約2,400か所の縄文貝塚の半数以上が関東地方に集中し、千葉県約700か所は全国の3割近くを占めます。ヨーロッパや北米、東南アジアも貝塚の多い地域として知られていますが、規模や密度、出土資料の豊かさなどにおいて千葉の貝塚に比肩すべき地域はほかにありません。第3図は、貝塚が集中する地域に灰色の網掛けをしたものであり、「奥東京湾」を含む東京湾と、古鬼怒湾という二つの大きな内海に面して集中していることがわかります。三大水系別に集計すると、東京湾：約7割、古鬼怒湾：約2割、太平洋：約1割という割合です。

表1は、千葉県内の市町村別の貝塚数をランキング化したものです。柏市の54か所は、貝塚が多いことで知られる千葉・松戸・市原・市川の4市に続く堂々の第5位です。海から遠い柏市ですが二つの海が接近していたことで多くの貝塚がつくられたの

です。貝塚といえば、千葉市が有名ですが、面積当たりの貝塚数では東葛地区に軍配が上がります。300か所もの貝塚があり、これは全国の1割を超える数なのです。

第1表 縄文貝塚市町村ランキング

(2019年のデータを現在の市町村で集計)

市町村名	貝塚数	順位1	面積km2	密度	順位2
千葉市	118	1	272.08	0.434	7
松戸市	63	2	61.33	1.027	1
市原市	61	3	368.20	0.166	13
市川市	54	4	57.40	0.941	2
柏市	52	5	114.90	0.453	8
野田市	46	6	103.54	0.444	6
船橋市	36	7	85.64	0.420	9
流山市	31	8	35.28	0.879	4
香取市	26	8	262.31	0.099	17
成田市	20	10	213.84	0.094	18
我孫子市	20	11	43.19	0.463	10
匝瑳市	17	11	101.78	0.167	11
鎌ヶ谷市	16	13	21.11	0.758	3
印西市	16	14	123.80	0.129	15
佐倉市	15	15	103.59	0.145	14
横芝光町	11	16	66.91	0.164	12
習志野市	10	17	20.99	0.476	5
袖ヶ浦市	12	17	94.92	0.126	16
他の市町村	98	(	25 市町村 )		
全体	722	か所			

## (2) 奥東京湾貝塚群

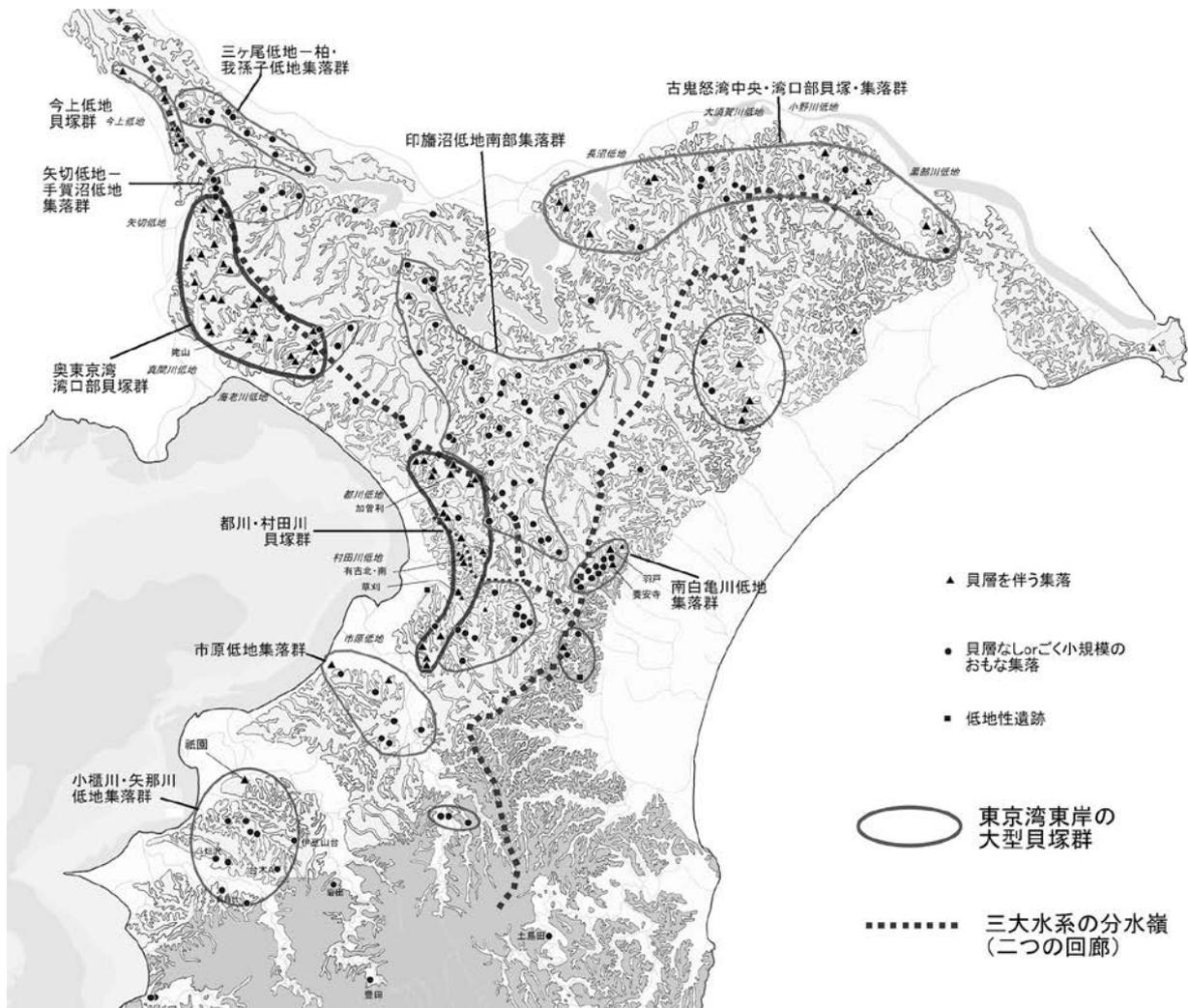
縄文前期には県北西部に貝塚が集中します。関東に深く入り込んだ「奥東京湾」を囲む集中の一部であり、東岸は下総台地の東葛・葛南地域、西岸は大宮台地と武蔵野台地にあたります。柏市域は分布の集中の東端にあたり、しかも古鬼怒湾の最奥部もごく接近していました。

中期以降大型貝塚が密集する千葉市や市原市は、この時期辺境にあたり、東葛・葛南地区が人口集中地帯で文化の中心だったのです。房総半島の歴史の特徴は、広大な平坦地に人口や勢力が分散する点にあります。この時期の一極集中型の遺跡分布は、長い房総の歴史上でも唯一の現象といえることができます。「第一繁栄期」と呼んでおきましょう。

## 4 中期大型貝塚群と近接する集落群

第4図は、東京湾東岸に大型貝塚群ができた時期のムラの分布図です。1軒でもこの時期（阿玉台・勝坂式期後半～加曾利E式前半）の住居跡が見つかった遺跡をムラ（集落）としており、報告書等の新知見によって常に更新しています。貝塚＝貝層をもつムラは▲、大きな貝塚はマークを大きくしています。

大型貝塚の分布を見ると、当時の東京湾の湾奥部のもっとも条件の良い2つの地域に40数か所が集中しています。いっぽうで、二つの貝塚群に接する部分から内陸部にかけて貝層をもたないムラが数多く分布しています。これまで、大型貝塚群の繁栄にばかり目が向けられてきましたが、隣り合わせの位置に貝塚以外の繁栄があったのです。



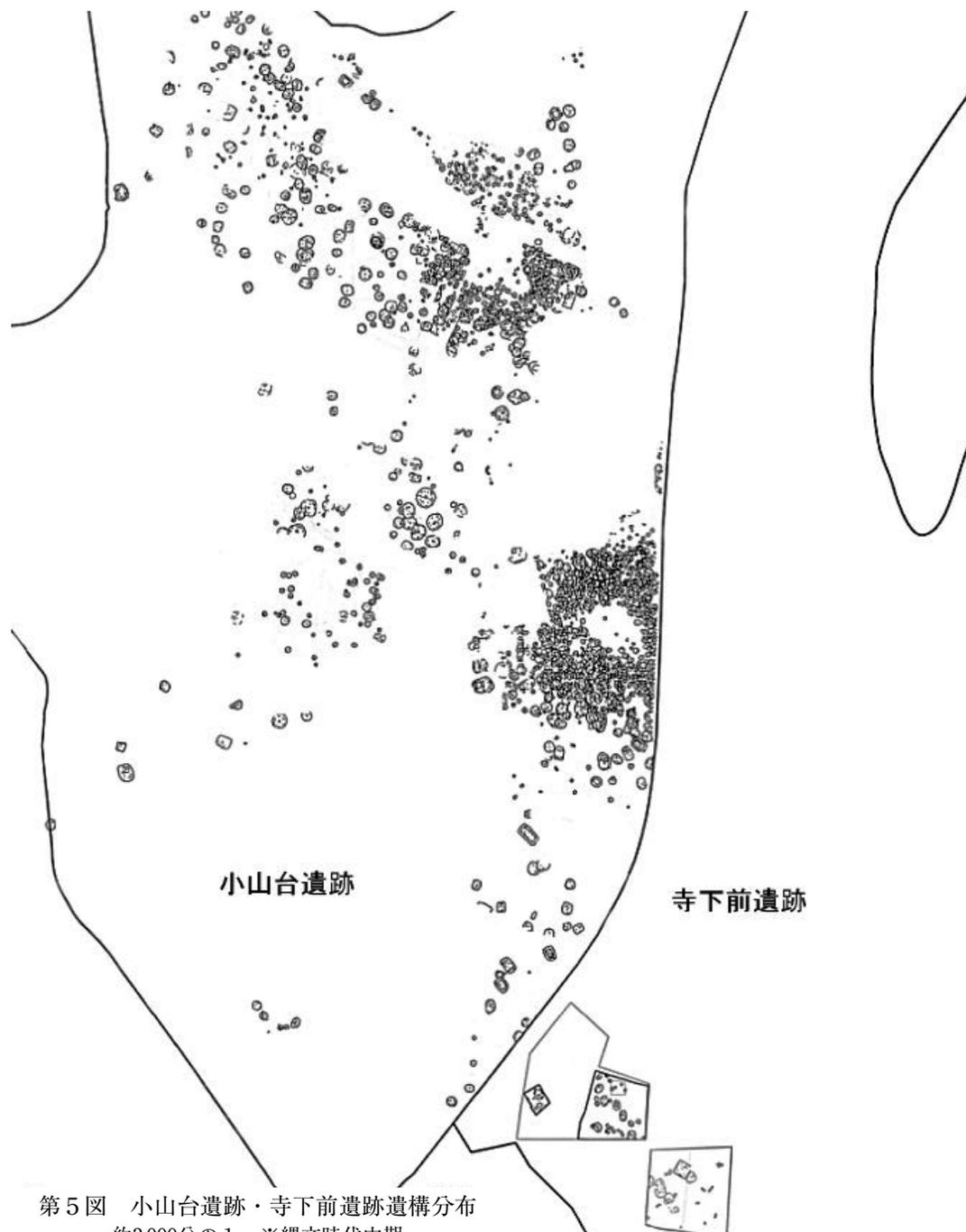
第4図

## 5 柏の中期集落群

### (1) 驚きの発掘成果

今回取り上げる柏市北部の大青田から大室にかけての地区は、つくばエクスプレスの開業以前は開発の少ない地域でした。わたしたちを最初に驚かせたのは柏たなか駅周辺の開発で発掘された小山台遺跡とおまつ大松遺跡です（第5図）。「環状集落」と呼ばれる真ん中に広場をもち、住居跡と貯蔵穴がドーナツ状

に集中するものが3つあり、その周囲にも遺構が広がっていました。今回、山崎さんから発表があった寺下前遺跡は、小山台遺跡から伸びる集落群の南東端にあたります。しかも同様のあり方は、今年度まで発掘が行われてきた柏インターの西側の出山遺跡と中山新田遺跡でもみられます（第6図）。「第二繁栄期」という表現が大げさでないことは二つの図でわかると思います。



第5図 小山台遺跡・寺下前遺跡遺構分布  
約3,000分の1 ※縄文時代中期

東京湾東岸では住居跡の大半が環状集落に集中しますが、ここでは環状に集中する遺構群の周囲の広域に住居跡が広がっていました。遺構のなかに入っている土器の量が多く、完形や大破片が多いことも特徴です。縄文時代の社会をさぐる上で、土器の量が豊富であることは大変重要なことです。東京湾東岸では土器があまり入っていない住居跡も多いのですが、柏の集落ではほとんどに土器がしっかり入っ

ているため、時期を知ることができるのです。

## (2) 手賀沼水系を囲む集落群

古鬼怒湾水系に面するこの集落群は、第7図のように今上低地貝塚群に接しているのに貝層を形成していません。野田市山崎貝塚<sup>やまざき</sup>と東亀山遺跡<sup>ひがしかめやま</sup>は、ごく近接していますが、分水嶺を超えた東亀山遺跡には殻付きの貝は持ち込まれなかったのです。山崎貝塚と東亀山遺跡は、二つの水系が近接する場所にあり、

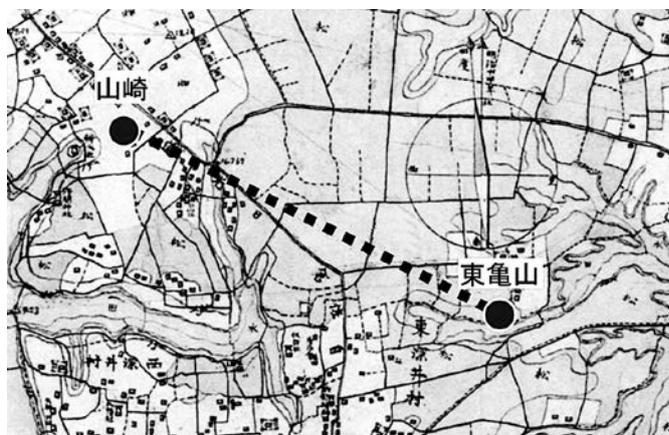


第6図 出山遺跡・中山新田遺跡遺構分布  
約3,000分の1

※縄文時代全時期。中期・後期主体  
(柏市柏インター西土地区画整理組合提供)



第7図



第8図

台地上をほぼ直線的に歩くことが可能です。距離はわずか1.6kmです(第8図)。

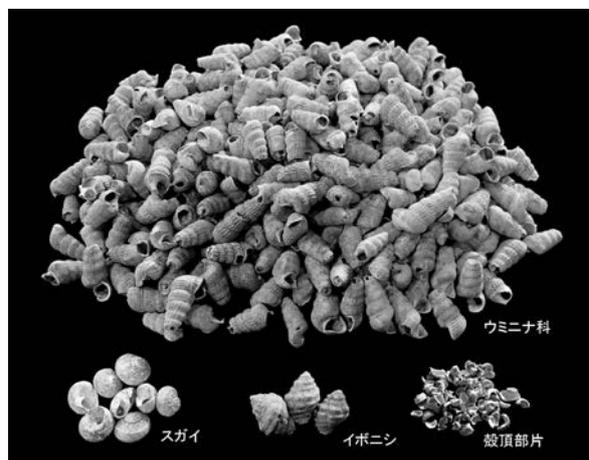
内陸部の集落群の東端は我孫子市並塚東遺跡に至ります。集落群は手賀沼南岸にもあります。こちらから松戸から船橋の大規模貝塚群と接しているのに貝層を形成しません。東側は榎方遺跡に至ります。手賀沼を挟む二つの集落群の東端は、現在手賀沼大橋がかかるところ、手賀沼が幅を狭める部分です。この渡河地点を通じて、南北の集落群がつながっていたのでしょ。このような位置関係をみれば、貝

類が東京湾沿岸の集落のみで消費されたとは考えられません。生の貝ではない形で内陸側に流通し消費されたとみるべきです。

#### ◆笹原遺跡

南側の群の西端にある笹原遺跡は、分水嶺を超えておらず、大型貝塚がある矢切低地に立地しています。この水系には、貝層をもたないか、または少ない流山市元木戸遺跡、宮ノ脇遺跡、庚申前遺跡と、大型貝塚の松戸市根木内遺跡、東平賀貝塚があります。笹原遺跡のあり方は、貝層をもたない集落と、大型貝塚の中間的なあり方をしていました。貝層の規模は小さいですが、12か所の遺構に形成されています。貝類の組成やサイズは全体に大きめですが、小さくても採取する計画性の低いものでした。海水魚の捕獲も河口や干潟の濞・藻場などにおいて魚種にこだわらずに網漁が行われた可能性が高く、海産資源の利用は低調です。頻繁に貝漁を行っていた大型貝塚とは大きく異なっており、大型貝塚を通じてではなく、海にをかけて直接採取していたと推定されます。

下の写真は、通常はまとめて出土することが少ない貝類がまとめて出土した事例です。ウミナナ類(フトヘナタリ)は先端が折断されており、折断した先端部の破片も出土しました。先端を切断して身を吸い出す方法で食べた証拠です。この食習慣



は、当時東京湾東岸では見られず、古鬼怒湾水系で典型的にみられるものです。立地は東京湾水系ですが、集団の出自が古鬼怒湾水系であった可能性を示しています。

笹原遺跡の貝は自己消費用であり、内陸の集落群には、大型貝塚などから殻付きでない貝を使ったなにかが運ばれたと推定されます。干し貝なのか、スープなのか、スープストックなのか、そのあたりはこれからの課題です。

### (3) 繁栄を支えたもの

#### ◆影響を受けた範囲

大規模なムラである小山台遺跡、大松遺跡、出山遺跡からは大量の縄文土器が出土しています。報告書刊行を終えて総量が記載された小山台遺跡B区だけでも1.9tに及んでいます。出山遺跡はまだまだこれから公表されていく段階ですが、中期前葉から中葉の土器の充実ぶりは、すでに東京湾沿岸を上回っているでしょう。その特徴は、他の地域の土器、あるいはその影響をつよく受けた土器が多いことです。どの地域の土器が多いのかに注目してみたいと思います。

小山台B区と大松遺跡では中期前葉から中期後葉まで途切れなく出土、とくに中期中葉の阿玉台Ⅲ式から中期後葉の加曾利EⅣ式が多いです。中葉から後葉に継続するムラがない東京湾沿岸と異なっています。中期前葉～中葉前半は西関東と北関東～南東北の土器が多数混じっています。西側と北側の両地域の影響をつよく受けており、ムラの成立・形成に関わった範囲を示している可能性があります。剥片石器の素材は当初は神津島産黒曜石が主体で、東京湾沿岸と共通していますが、加曾利EⅡ式期になるとチャートが上回るようになります。東京湾沿岸ではこの時期も圧倒的に黒曜石が多いので、この点でも異なっています。

#### ◆集団狩猟拠点仮説

シカなどが集団移動する経路にあたるこの付近が、狩猟好適地と認識されていた可能性はかなり高いといえます。二つの内海は、中期には退いていったとはいえ、現在よりも水域は広く、シカなどの移

動経路は幅が狭く、ここを通るという情報が得られていたはずですが、ただし、この付近の台地は低くならなかなので、少人数の狩猟では逃走経路を限定することが難しかったでしょう。したがって、かなり広い地域から多くのムラの人たちが集まって集団狩猟をしたのではないか、この地で定住する集団と、出入りする集団があったから環状集落と周囲の広域に住居跡があるのではないか。これが今のところの見立てです。この地域で繁栄を支える要素として狩猟以外の可能性が思いつかないのです。

#### ◆石器組成

こうした考えは、発掘成果等によって検証していく必要があります。まだこれからの課題ですが、大まかな検討結果だけ示しておきます。第9図のグラフは、生業の割合の大まかな傾向を検討するために、石鏃(狩猟具)、打製石斧(おもに根莖類等の収穫具・耕具)：磨石類(デンプン質食材等の加工・調理具)の出土数の割合を比較してみたものです。

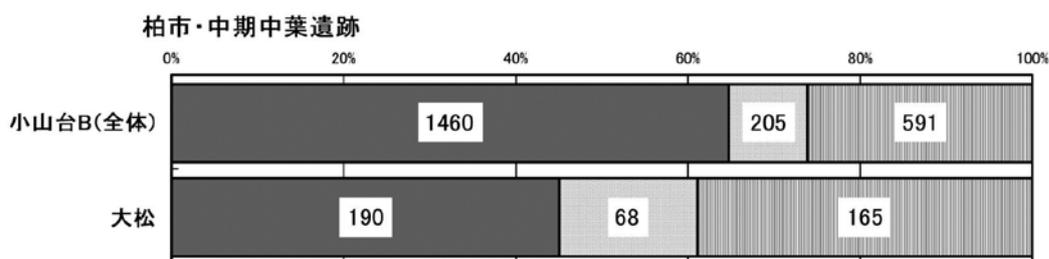
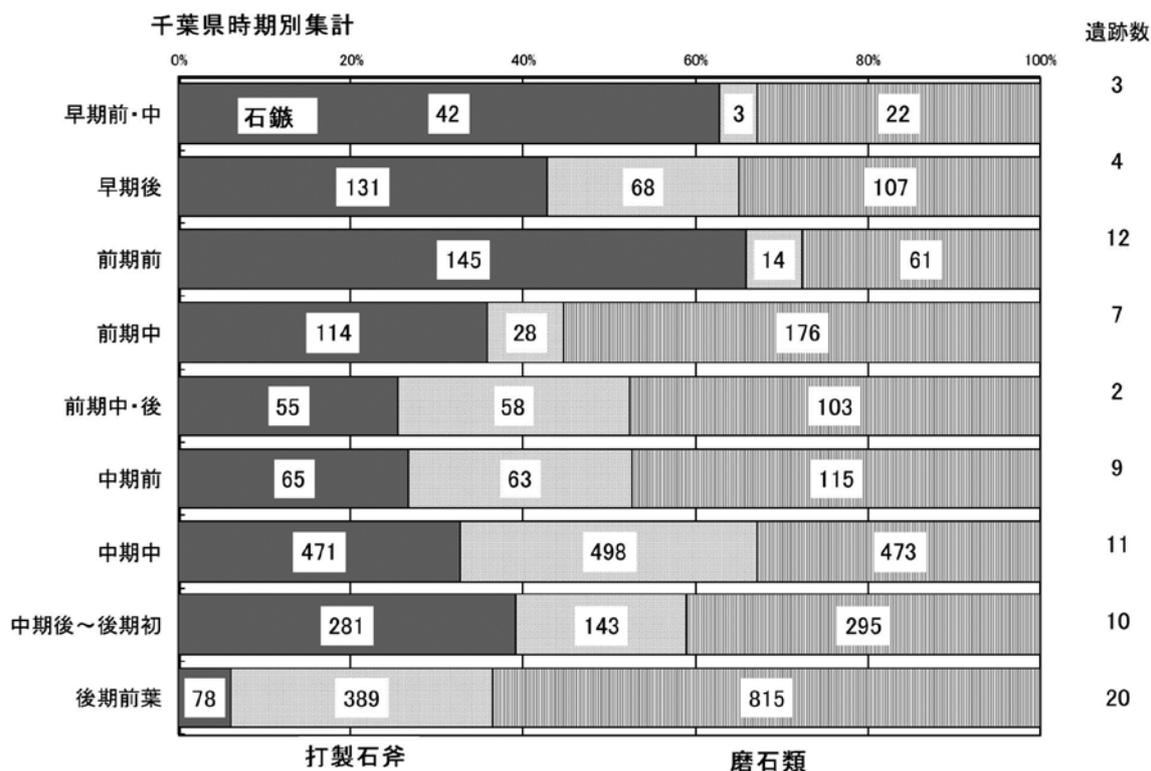
上段は、県内の調査例のなかから、時期を絞ることができる事例を時代ごとに集めて変遷を検討したものです。前期前葉までは石鏃が多く、その後植物質食材に関わるものが増えること、中期中葉ではおおむね1：1：1の割合になることなどを読み取ることができます。

下段の小山台遺跡と大松遺跡のグラフをみると、中期中葉全体に比べてやはり石鏃の割合が多く、狩猟具が多い傾向を示しています。

#### さいごに

柏市域の縄文文化繁栄の謎を解くには、詳細な分析・検討と、周辺の広域を見渡す両方の作業が必要です。まだまだこれからというところですが、狩猟好適地であること、二大水系及び下総-常陸の結節点であることが重要な意味をもっていたことは疑いのないところです。

後の時代をみると、茨城方面との連絡道は、①佐倉・成田ルートと②市川・柏ルートの二つが使われています。古墳時代から奈良時代にかけては①がメインルートでしたが、②がメインになった平安時代



第9図 縄文時代各期と対照遺跡の石器組成

から中世には、柏市付近に重要な遺跡が集中するようになります。

柏が輝く時期は、常磐線、常磐道、そしてつくばエクスプレスの開通など、時代を超えて茨城への連絡が重要となったときといえそうです。

今回は、印旛郡市文化財センターの主催行事で柏市のお話をさせていただきました。東葛地域と印旛地域はどの時代も密接な関係にあったので、連携のメリットはとて大きいと思います。縄文中期の社会を考える上でも、大型貝塚発祥の地である香取地区と、それを引き継いだ東京湾沿岸、その間をつなぐ東葛・印旛地区の発掘成果は、どれも欠くことのできない重要な地域です。二つの地区の職員のみさんの今後の調査・研究に期待し、お手伝いもさせ

ていただきたいと思います。

なお、柏の特徴と文化財の活用計画をまとめた「柏市文化財保存活用地域計画」が令和5年7月に国の認定を受け、このほど刊行されました。柏市の文化遺産の特質や、各時代の文化の概要が地理的な特徴と合わせて理解することができます。柏市のウェブサイトから、概要版、本編をダウンロードできるので、ぜひご覧ください。

さいごになりましたが、発表の機会を与えてくださった印旛郡市文化財センターの喜多裕明さん・山崎慧さん・井出稜さん、ご教示をいただいた上守秀明さん、荻澤太郎さん、画像を提供していただいた柏市柏インター西土地区画整理組合に感謝を申し上げます。